くらしは文化 no.85

京都府京都市

# 旧武徳殿

## 和風建築にトラスを採用し、吹き抜けの大演武場を実現

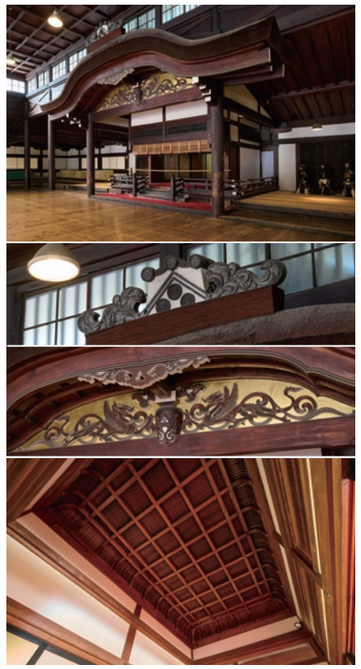
京都府京都市の旧武徳殿は、京都府技師・松室重光の設計で明治32（1899）年に竣工した日本最古の演武場。約200畳の板の間や観覧席を擁する近代和風建築に、トラス構造やレンガ積み基壇など西洋建築の技法を取り入れている。国指定重要文化財。

檜皮葺き、唐破風屋根の玉座がある旧武徳殿。高窓から入る自然光が館内を照らし、光源は直接、目に入ることがない。

①千鳥破風を頂く桟瓦葺き主屋根と緩やかに延びる裳階が大寺院を思わせる外観。
②舟肘木や角柱を用いた外壁に見られる半蔀。上半分を外側へ吊り上げて開く。

③玉座の背後にあたる位置に檜皮葺き、唐破風屋根の車寄せが増築された。
④車寄せには西洋絵画の影響を受けたと言われる亀岡式の装飾がみられる。

⑤板の間の四周を観覧席が取り囲み、スタジアムのような構成になっている。柔道などで使用する際は板の間に畳を敷き詰める。⑥観客席には高欄を回す。廊下側は登り高欄としている。⑦板の間の隅にある換気口。



玉座は前の間、玉座の間、控えの間で構成。ここにも亀岡式の装飾がある。玉座の間は折り上げ小組格天井。

平安期、桓武天皇は大内裏（だいだいり）の北西に建つ道場で武技を奨励したとする故事がある。平安遷都1100年にあたる明治28（1895）年、大内裏の大極殿を模して平安神宮が造営され、明治32年には、その北西に伝統的な武道の振興を願う大日本武徳会によって旧武徳殿が建てられた。これは、故事にちなんだ可能性があるといわれている。

旧武徳殿は単層で、切妻造の母屋に寺院を思わせる大屋根と緩勾配の裳階（もこし）が付く和風のたたずまい。白漆喰の外壁には平安期の住宅にみられる半蔀（はじとみ）がある。その一方、西洋式構造・要素も採用しており、折衷様式となっている。

設計者の松室重光は伝統的な和風建築の様式を再構成するとともに、広大な板の間を設けるためトラス構造を採用、大スパンの架構を可能にした。松材の板の間は約200畳もの広さで、中心部に柱がない吹き抜けの大空間となった。下屋上の四方にガラス窓を設けたのも西洋建築の手法で、演武場内を自然光で均一に明るくする工夫である。板の間を取り囲む畳敷きの観覧席は裳階の下にしつらえられ、現在は3段の雛壇形式になっている。

創建時の旧武徳殿は「仮本殿」と称し、建て替えを前提としていた。そのため玉座は狭く、皇族席もなかったことから、大正2（1913）年、京都府技師の亀岡末吉が玉座の改築、車寄せ・武者溜（だ）まりの新築を行った。亀岡の手がけた玉座・車寄せの蟇股（かえるまた）や木鼻、大瓶束（たいへいづか）などには「亀岡式」と称される流麗な装飾が施されている※。

その後、旧武徳殿は武術教員養成所の設置、アメリカ軍による接収、京都市警察学校の利用など、幾多の歴史を紡いできた。創建120年余を経た現在も剣道や柔道、なぎなたなどの競技・演武の殿堂として人々に親しまれ、国指定重要文化財にも指定されている。

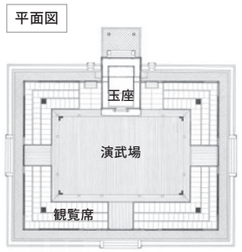
※小規模な改変を昭和60年からの改修で大正期の姿に復元した。

梁行断面図

基壇に見られる煉瓦積みの換気口。

玉座の控えの間の地下通路。

平面図




出典：『旧武徳殿主屋修理工事報告書』

用語説明

【大内裏】皇居（内裏）や諸官庁を配置した一区画。平城京や平安京では中央北部にあった。

【裳階】寺院建築で建物外部の軒下に回した庇（ひさし）。本屋の軸部を裳裾のように隠すことからの名称。

【半蔀】上半分の外側を吊り上げるようにし、下半分をはめ込みとした蔀戸。

【木鼻】社寺建築で肘木や虹梁などの端が柱の外側に突出した部分。彫刻などが施される。

【大瓶束】大仏様建築にみられる瓶子形の束。

京都市左京区聖護院円頓美町46番地の2　協力：京都市

くらしは文化バックナンバー